



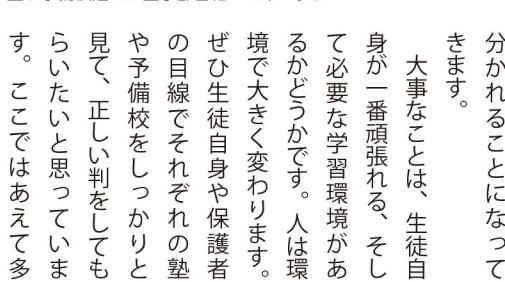
医学部合格のためには医学部受験の学習環境が必要。



富士学院の各校舎には学院専用の食堂が完備され、生徒はいつでも利用できる。



塾や予備校選びが医学部合格への第一歩。



大事なことは、生徒自身が一番頑張れる、そして必要な学習環境があるかどうかです。人は環境で大きく変わります。ぜひ生徒自身や保護者の目標でそれぞれの塾や予備校をしっかりと見て、正しい判断をしてもらいたいと思っています。ここではあえて多

そのため、高校の勉強だけでなく、予備校などで受験対策を講じる高校生も多い。そこで、全国に6校舎を開設する医学部受験予備校富士学院の医学部受験の心構えや、合格のために必要な学習環境などについて伺った。

難易度は高止まりながら合格チャンスは若干拡大
近年は、入試の難易度が年々上昇していくような高い医学部人気が続いているましたが、18歳人口の減少に



富士学院 坂本友寛 学院長（さかもと・ともひろ）

医師を目指す人が増加し、近年の医学部入試は非常に高い競争状態が続いている。そのため、高校の勉強だけでなく、予備校などで受験対策を講じる高校生も多い。そこで、全国に6校舎を開設する医学部受験予備校富士学院の医学部受験の心構えや、合格のために必要な学習環境などについて伺った。

正しい入試情報とそれを生かす指導が重要 医学部合格は学習環境が左右する

考えていいと思います。

しかし、他学部の入試と比べて、まだ競争率は極めて高く、難易度は高止まり状態といつていいでしょう。依然として高い学力が求められることには間違いないですが、合

で諦めずに頑張り続けることが、合格につながってくることになると思

います。
ただ、合格のチャンスが広がっていることも確かですので、最後まで諦めず頑張り続けることが、合

格につながることになると思

医学部の入学試験は就職試験でもある

医学部入試は、他学部入試と決定的に違う点があります。それは、医学部に進学することは、すなわち医師になることであります。医学部の入学試験は就職試験も兼ねているということです。そのため、医学部入試で合格できないのが医学部入試の最大の特色です。

日本での医学部は、現在、医学教育を国際標準に合わせるために大幅なカリキュラム改革に取り組んでいます。最大の変化は、臨床実習の期間が従来の約1年から約2年間に伸びることです。その分、基礎医学や臨床医学などの講義時間が大幅

に減りますが、医療の進歩に伴って覚えるべき知識はどんどん増えているのが現状です。教員にも全てを教える時間がなく、医学部の学生は自ら進んで予習・復習など、とにかく勉強する姿勢がないと授業についていることが難しくなります。これが

だからこそ、医学部入試では、面接や小論文などを通して、本当に医師になりたいのか、ハードな勉強を続けられるのかを、これまで以上に強く見極めようという傾向が顕著になりました。もちろん、高い学力も要求されますので、医学部を目指す受験生は、得意科目を更に伸ばし、苦手科目は作らないよう努力を伸ばしつつ、医師という職業に必要な資質を磨いていくという心構えを持つことが必要不可欠なのです。

大学で異なる出願作戦が必要

医学部受験の準備で、もう一つ重要なのが出願先の選択です。医学部の入試問題は、出題の範囲や形式、問題の難易度や出題の傾向が大きく、医師になるという自覚や覚悟、学力の高い受験生でも出願先を間違えると不合格になり、逆にそこまでの学力が無くても出願先さえ間違わなければ、合格の可能性も出てきます。つまり、私立も含めた医学部志願者数の総数は、若干減少傾向にあります。全体の志願者が減っているという意味では、医学部に合格するチャンスは、これまでと比べ、若干広がりつつあると

塾や予備校の選択は合否にも影響を及ぼす

医学部を目指す現役生や受験生の多くは、塾や予備校を利用している

その上で、一番大事なことは、自身の正しい現状分析と大学との相性を踏まえた正しい出願先の選定です。

とくに国公立大は、基本的には前期と後期の2回しか受験チャンスがないため、どの大学を受験するのかで合否が大きく分かれます。一般的にはセンター試験の結果をもとに出願先を決めることになりますが、学

力の高い受験生でも出願先を間違えると不合格になり、逆にそこまでの記試験で高い得点を取っていても落とされるなどの結果を生むことがあります。又、面接試験も個人面接や集団面接、グループ討論など大学によって形式が異なるので、合格を勝ち取るためにには、大学毎の正しい入試情報を収集し、その大学に応じた対策をとつていくことが必要となります。

その上で、一番大事なことは、自身の正しい現状分析と大学との相性を踏まえた正しい出願先の選定です。

とくに国公立大は、基本的には前

期と後期の2回しか受験チャンスがないため、どの大学を受験するのかで合否が大きく分かれます。一般的にはセンター試験の結果をもとに出願先を決めることになりますが、学

力の高い受験生でも出願先を間違えると不合格になり、逆にそこまでの記試験で高い得点を取っていても落とされるなどの結果を生むことがあります。又、面接試験も個人面接や集団面接、グループ討論など大学によって形式が異なるので、合格を勝ち取るためにには、大学毎の正しい入試情報を収集し、その大学に応じた対策をとつていくことが必要となります。

その上で、一番大事なことは、自身の正しい現状分析と大学との相性を踏まえた正しい出願先の選定です。

とくに国公立大は、基本的には前

期と後期の2回しか受験チャンスがないため、どの大学を受